

『山形県立米沢女子短期大学紀要』第五十一号
二〇一五年十二月 日刊 別刷

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（五）

蘭
部
寿
樹

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（五）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇二年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語については、やや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（三） 応永二十三年（一四一六）分 『米沢史学』

三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号（二〇一四～一五年）

○現代語訳（四） 応永二十四年一月一日から応永二十四年四月三〇日まで。『米沢史学』三二号、二〇一五年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二十四年五月一日から八月二八日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

同「研究余滴 小さな語誌―「雑熱」について―」（『国文学攷』一五六号、一九九七年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

松蘭斉『「看聞日記」に見える尼と尼寺』（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）

同「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

(応永二十四年)五月一日、晴。「すべてのことがとても幸せだった」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

小野道風の漢詩

二日、晴。田向経良三位が京へ出た。室町殿へ贈る進物を使者として鹿苑院に届けるためである。その進物は、書道のお手本が一卷。これは、小野道風の筆による漢詩である。表紙は青絹で、淡く雲が描かれている。巻子の軸は水晶でできている。後光厳上皇が故榮仁親王へお与えになったものだそう。それから歌合一巻。これは伏見上皇の直筆で、萩原殿直仁親王の形見として父・大通院へ与えられたものである。

石帯「金青玉」

さらにもう一つは、青瑠璃石の飾りが付いているために、「金青玉」という名が付いている石帯である。さらに、帯本体には銀メッキした方形の石を麻糸で組み込んだ飾りなども付いている(※)。これらの贈り物に、私の書状を添えて、鹿苑院へ送った。

そもそもこの石帯は、何度も使うようなものではない。ある記録によると、節会の時、警備責任者役の者が使う石帯だという。またある説によると、朝廷のお祝いの席で用いるものだという。はたまた神事御装束の時、天皇がこの石帯をお着けになるとも言われているようだ。

この石帯は、先年、故足利義満殿が伏見殿へいらっしゃた折に、崇光上皇が義満殿へ引き出物として差し上げようとされたと聞いている。そのために、今は亡き三条実継内大臣に事務取扱を命じて、石帯本体飾りの銀メッキを新調させなされた(※)。しかしその後、

この石帯を贈ることに反対する意見がでてきたので、結局、義満殿へはお贈りにならなかった。

そしてその後、宮家の箱の底に大切に保管されていたのである。そのような珍しい品なので、今回、この石帯を足利義持殿へ献上することにした。この石帯は、何かしら足利家にご縁がある品なのだろう。私の代になって献上することになるとは、なにか不思議な巡り合わせである。

聞くところによると、等持寺八講(※)が今日から始まったという。今出川実富大納言が参列したそう。

善基が来た。仁王経を読んで、特別に祈祷してくれた。宮家の女性たちは、薬玉作りに忙しい。惣得庵主が私の娘に単衣の着物を一着贈ってくれた。思いがけない心配りであった。

※「銀メッキした方形の石を麻糸で組み込んだ飾りなどがある」：原文には「縵(麻糸) マキ銀組等これ有り」とある。

※「銀メッキを新調させなされた」：「金青玉」という名前からすると、本来は金メッキの飾りだったものを、この時、銀メッキに変えたのかもしれない。

※等持寺八講(とうじはっこう)：足利將軍家が先祖等の供養のために、等持寺で行った法会。法華経八巻を八座に分け、朝夕一座ずつ四日間て講ずるもの。

三日、晴。昨日、鹿苑院へ行っていた田向三位が帰ってきた。鹿苑院にはいろいろな末寺の住職たちが集まっていたという。これは鎮守社でお経を読むためだったそう。鹿苑院主と会って、いろいろと話をした。石帯や書道のお手本などの贈り物は、明日、室町殿のお

目にかけるということだった。

四日、晴。朝早く、檜皮葺の屋根職人が来た。そしていつものように、屋根に菖蒲を挿してくれた。それをみて、私の心中を和歌にして詠んでみた。

思ひきや あやめを今年 我が宿の 主となりて

葺かすべしとは

今よりは 千世の五月を 契りなん 今日葺きそむる

軒のあやめよ

薬玉の贈答

薬玉を作り揃えた。漆塗りのお盆に紅の薄様紙のように菖蒲を敷き詰め、その上に薬玉を置いた。それを長い箱に納めた。その長い箱に天秤棒を通して、薄紅色の狩衣を着た人夫に昇がせた。それに女房奉書（※）の添え状をつけた。

それを清原常宗少納言入道を通して室町殿へ送った。室町殿は今、等持寺にいらつしやるというので、等持寺へ直接送った。そして常宗に取り次いでもらって、薬玉を室町殿のお目にかけた。「以前と変わらず薬玉をお贈り下さり、うれしく、かつおめでたいことです」という、室町殿のお返事があったそうだ。

室町殿の若君へも、同じように薬玉を贈った。若君へは入江殿に取り次いでもらった。すぐに若君のお返事があった。そのお返事は「おめでとうございます」というものであった。この他にも、以前からお付き合いのある方々へ皆、薬玉を贈った。

今出川家からは、根の付いた菖蒲が二つと菖蒲枕などが贈られてきた。この今出川家からの贈り物は、毎年のことである。

小川禅啓の任官

さて小川禅啓が備中守に任命された。この事は、大通院の代に禅啓が希望していたことで、藏人である勸修寺経興に任官の用意をするよう、お命じになっていた。ところが、出家した者が任官するのは、近年の武家に例があるものの、よろしくない事だということで、今まで話が進まなかったのである。

そうしている間に、禅啓は山名時熙右衛門佐を通して任官の申請をしたらしい。その後、備中守に任命されたと、山名の奉公人である垣屋から禅啓に書状が届いたそうだ。

これは、喜ばしいことではある。ただし、山名家のやり方には不審な点もある。強引に任命させたのであろうか。このごろの武家のやり方は、このようなものだ。

すぐに禅啓が祝い酒を用意してきた。一献がさらには数献に及ぶ酒宴となった。田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・寿藏主が酒宴に参加した。禅啓にはお祝いとして扇を与えた。

※女房奉書（にようほうしよ）：天皇や上皇など主人の上意を受けて、女房が散らし書きで書いた文書。主人自身が出すこともある。五日、晴。今日は端午の節供なので、「たいへん幸せだ」と予祝した。風呂に入った。浴室に、光台寺の僧である玄超が酒を持ってきた。思いがけない心配りである。その後、いつものように節供のお祝いをした。

六日、雨が降った。等持寺八講の最終日である。今出川公富参議兼右近衛中将が参列したそうだ。

京の化け狸

八日、晴。勝阿が一献のお酒を持って来た。さて聞くところによると、今日、京都の一条辺りの酒屋に一人の下女がやって来て、酒を注文してすぐに飲んで帰ろうとしたそうだった。

その帰り際に、犬が来て、その下女に吠えかかった。下女は驚いて逃げ出した。下女につきまとう犬を人々も追いかけた。そして犬はなおも下女に噛みつくようとして走り懸かっていき、吠えた。そうしたら、下女のかぶっていた帽子が落ちた。なんとこの下女の頭の上には、毛が生えている耳があった。それで、この下女が化け物だと分かった。

そこへ大勢の人々が集まってきて、この化け物を捕まえ縛りつけた。そうしたら、下女はたちまち年老いた狸の姿になってしまった。人々が殴りつけ、引きずり回したので、狸は死んでしまったそうだった。まれにみる不思議な出来事だ。

十一日、晴。鹿苑院主から書状が来た。明日、田向三位を鹿苑院へ寄こすようにとのことだった。

室町殿の反応

十二日、晴。椎野寺主がやって来た。田向三位は、早朝、京都へ出かけ、夕方に帰ってきた。鹿苑院主が対面して田向とお話し下さった。鹿苑院主は、この四日に、贈答の品々を室町殿の所へ持っていき、お目にかけたそうだ。室町殿は、石帯が殊の外お気に入りになって、「たいへんな宝物だから、うれしい」と仰ったと、鹿苑院主はお話し下さったという。「一条関白がこの石帯をご覧になったことがあるようなので、記録を調べてみたい」とも、室町殿は仰ったそうだった。

伏見宮家の領地継承を承認する件

この贈り物を差し上げながら、鹿苑院主は伏見宮家の領地継承承認の件を室町殿へお伺い下さった。そうしたら、「了解したので、後小松上皇様へこのことを申し入れておこう」ということだった。

また鹿苑院長老が重ねて申されたことには、「伏見宮家のことをお取りはからい下さる上は、領地継承の承認状をお出し下さるのではありませんか」と室町殿へ申し上げたという。そうしたら、「まずは伏見宮家の領地である播磨国国衙領（※）について、後小松上皇様へ申し入れてみよう」というのが、室町殿のご返事だったそうだった。

広橋兼宣大納言が室町殿の御前に控えていた。広橋は、「後小松上皇様へ申し入れをなさるのに何の問題もございません」と口添えしてくれた。「それでは、なんとか申し入れてみよう」と室町殿がお答えになったという。

「以上のような経緯なので、まずはおめでとうございます」と鹿苑院主が田向三位に話してくれたという。

その後、申し入れを早くするように、田向三位が広橋に督促した。これに関して、鹿苑院主が「私の方から、広橋へ催促しましょう」と言ってくださった。それで鹿苑院主は広橋宛の書状をお書き下さった。田向三位は、その書状を持って広橋の屋敷へ行って催促したところ、広橋は「明日、上皇御所へ参って、上皇様へお話しいたします。しっかりと話ししますので、ご安心ください」と言ったという。うまく事が運ぶように、心から願っている。

※国衙領（こくがりょう）：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような

私領になつてゐる。播磨国（兵庫県）の国衙領は、伏見宮家の領地。十六日、晴。仏事のために身を淨めた。冷泉正永が来たので、皆で双六をした。

琵琶法師安一座頭

十七日、夕方から夜にかけて、風が吹いた。琵琶法師の安一座頭が来た。彼は千一検校の弟子だという。五辻教仲や田向三位のところに出入りしている琵琶法師らしい。平家物語を一―二句語らせた。上手さは並程度の平家語りであつた。

十八日、雨が降つた。今度の二十二日が葆光院の没後百ヶ日である。御仏事の準備をするように命じた。

近衛局の腫れ物

五日か六日辺りから、近衛局に腫れ物ができた。とてもひどい容体なので医師に診断させたところ、悪性の水腫れだという。単なる腫れ物ではないというので、近衛局はうろたえなかつた。そのため近衛局は仏事どころではないと仰る。そこで、寿蔵主に御仏事の事務取扱をするように命じたが、ちよつと難しいですという返答だつた。

十九日、晴。御仏事の事務取扱をすることを寿蔵主が承諾してきた。神妙である。また琵琶法師の安一が来て、平家物語を語つた。二十日、雨が降つた。安楽光院の長老が来たので、対面した。初めて会つたが、すぐに帰つた。今夜から葆光院の御仏事を始める。宮家の男女で、お経を読む順番をくじ引きで決めた。善基と寿蔵主らもそれに参加する。冷泉正永も参加する。

二十一日、晴。椎野寺主が御仏事をきちんと取り仕切つてくれた。軽

食をとつた。安一が来た。道場に呼んで、平家物語などの芸をさせた。お経を読んだら、眠気が覚めた。

治仁王没後百ヶ日の御仏事

二十二日、晴。今日が治仁王没後百ヶ日である。周乾蔵主・物得庵主・同庵御寮理勝や明元らを招いた。いつものように軽食をとつた。蔵光庵へ些少であるが御仏事料を納めた。西大路隆富がわざわざ、御仏事料を少々持参してくれた。神妙である。

安一が来た。今日、伏見から旅立ちますと言つてきた。それで琵琶の弦一揃いと茶・羅茶（※）などを与えた。

伏見宮家の預け地

さて宮家が預けている田地を大光明寺長老がお寺に頂きたいと頻りに申している。そこで、葆光院を供養する経費として、大光明寺へ寄付することにした。そのことを寿蔵主を通して長老に伝えた。そうしたら、今日の御仏事終了をもって、この田地を正式に頂きますと長老が言つてきた。

この名田（※）は、父・大通院が指月庵に滞在なさつていた時に、その間のお食事の費用を捻出するため、仮に大光明寺へ預けておかれたものである。それを長老は寄付してくださいと言つてきたのだ。本心としては寄付していいかどうか、いまだに迷つてゐるので、寄付する旨を記した書類を書き与えるのは控えることにした。寿蔵主を通して、寄付することを口頭で伝えるに止めた。

近衛局の腫れ物は、ひどい状態だ。大光明寺の僧が治療してくれた。

※羅茶（らつちや）：茶・甘草などの漢方生薬に香木を混ぜて丸状に

した酔い覚ましの薬。蠟茶。橋本素子氏のご教示による。

※名田（みょうでん）：荘園内の田地の構成単位である名（みょう）の田地のこと。

地蔵講

二十四日、晴。地蔵講をした。善基が導師を勤めてくれた。講が終わってから、いつものように軽食をとった。この地蔵講は、大通院の代に定例行事にお定めになり、椎野寺主以下六人が当番になって講の世話をするようになっていた。今日は田向三位が当番だった。

御連歌会始め

地蔵講が終わってから連歌会をした。私の代になって初めての連歌会だ。まず私が最初の句を詠んだ。

いやつきに 花の常夏 名も久し

思うところがあつて、少しお祝い気分で詠んだ。田向三位は、しきりに感心していた。連歌会の参加者は、私・椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・冷泉正永・善基・生島明盛・行光らである。

連歌会に先だつて、まず田向三位が立ち上がり、私の前に盃を持ってきた。私の代で初めての連歌会なので、特に丁寧にいたしますと田向三位は言った。神妙なことである。夕方に百韻が終わった。冷泉正永は、五十韻終わったところで、退出した。百韻が終わる前に出て行くのは、無礼なことである。

二十五日、晴。田向三位が京都へ出た。鹿苑院や広橋などへ使者として向かったのである。領地継承の承認を催促させるためである。

また連歌会を行った。この連歌会では誰が上手に詠むか勝負することを申し合わせた。参加者が少なかったので、五十韻まで詠んで

中断した。

二十六日、晴。昨日の連歌会を再開して、百韻が終わった。連歌の先生である承盛が参加者の歌を採点することになった。

二十七日、晴。豊原郷秋が来た。音楽会をした。盤渉調の曲を七〜八弾いた。田向長資朝臣も参加した。音楽会が終わって、しばらく雑談をして過ごした。

田向三位が帰ってきた。伏見宮家領地継承の承認について、後小松上皇様への取り次ぎはまだ行われていないらしい。室町殿は二十日から北野天満宮にお籠もりになっている。広橋は、このところずっと風邪だという。それやこれやで、上皇様への取り次ぎが進んでいないということ、鹿苑院主が話してくれたそうだ。

二十九日、晴。豊原郷秋が来た。一越調の曲を十、次に平調の曲を七つ、そして朗詠などをした。田向長資朝臣が稽古不足なので、注意した。長資は心から音楽が好きではないようだ。私が強く叱るのも氣にくわないようだ。音楽会が終わって、数時間雑談をした。その後、郷秋は帰っていった。

閏五月一日、晴。「すべてのことがたいへん幸せだ」と予祝した。田向三位の家で、馬屋を建設しているそうだ。

白い龍

二日、晴、夕方、にわか雨が降った。宇治川から龍が舞い上がる姿を、月見岡の下あたりで人々が目撃したという。白い龍だそうだ。河辺にいた草刈りの子ども一人が黒雲に巻き上げられ、すぐに墜落して氣を失ったそうだ。翌日、目が覚めて無事だったという。まれなことだ。

豊原郷秋が来た。双調の曲九つ、笙の伴奏付きで朗詠を一首、次に太食調の曲七つ、また朗詠一首をした。田向長資朝臣も参加した。笙は耳慣れないので、演奏が少し乱れてしまった。よろしくない事だ。琵琶のことについて郷秋が質問してきた。琵琶の名器の名前などを紙に書いて与えた。

平戸記

三日、玉櫛禪門が平戸記（※）五巻を返してきた。二条持基大納言が読みたいと言っていたので、玉櫛禪門を通して貸し与えていたのである。

※平戸記（へいこき）：鎌倉時代の貴族・平経高の日記。

四日、晴。惣得庵御寮理勝と稚児の明元らが来た。ゼンマイ（※）などを持ってきた。数献の酒宴をして、さらには無礼講の酒盛りとなった。朗詠や声明などを歌った。田向三位や庭田重有朝臣も参加した。

箏「梨花」

田向長資朝臣は内裏小番に出ていたが、帰ってきた。彼は後小松上皇様の書状を持ってきた。長橋局藤原能子殿が取り次いでくれたという。その内容は、「箏「梨花」を修理させました。とてもすばらしい楽器なので、大事にします」というものだった。

後深草上皇の御移徙御記

それに加え「文永三年（一二六六）十一月の後深草上皇の御移徙（※）御記を読みたいので、探し出してください」とも書かれていた。「先年、朴（ほお）の木箱に入れられた後深草院御記を進上して下さり、手許に置いておりました。ところが去年、その内の二箱を火事で焼き失ってしまいました。そのため御移徙御記も失っ

てしまいました。もし後深草院御記があれば、写本でもいいですから見せてください」との仰せである。

また「なお、何か必要なことがあれば、連絡してください。なんとか手配してさしあげましょう」とも書かれてあった。まずは、ありがたいことである。

※「ゼンマイ」：原文では「紫箏」とあり意味不明であるが、紫箏（ぜんまい）の誤記と解した。

※移徙（いし）：転居のこと。

五日、晴。即成院へ預けておいた御移徙御記の箱一つと後深草院御記第十巻の上・下巻を取り寄せて、調べてみた。その中から、文永三年御移徙御記一帖を選び出した。これは後深草上皇の直筆である。すぐに私自ら書写した。

真修院の死

さて真修院殿がこの二日にお亡くなりになったようだ。勝阿が知らせてくれた。この一二年、脚氣を患っていた。それが最近、悪化して、とうとう亡くなってしまった。とてもかわいそうである。

真修院は崇光上皇の女房で三条局と呼ばれていた。崇光天皇がもつとも愛していた女性である。真修院殿がお産みになったご子息たちは、相応院弘助親王・入江殿今御所・真乗寺比丘尼御所瑞室殿・南禅寺阿栄蔵主・叡蔵主ら五人である。

崇光天皇がお亡くなりになってすぐに、三条局は出家なさった。仁和寺に真修院という草庵をお建てになって、隠居なさっていた。崇光天皇の侍女のなかで生き残っておられたのは真修院殿だけであり、真修院殿は祖父の崇光天皇を偲ぶたった一人のよすがであった。

とても心が痛む。

伏見宮家から与えていた御恩地については、真修院殿から父・大通院へ申し入れがあったので、真乗寺比丘尼御所瑞室殿が相続なさることになっている。勝阿を使者として、相応院らご遺族に弔意を表しておいた。

後深草院御記

六日、晴。後深草院御記一卷（文永三年十一月の日記）を書き写して、上皇様へ送った。「この他にも必要な部類記（※）がありましたら、また差し上げます」と申し入れておいた。また「箏『梨花』を早速修理なさったこと、恐れ入ります」とも書いておいた。この書状は、勾当局に託して送った。

琵琶「仙家」・「虎」

琵琶「仙家」を修理のため、今出川家に送った。琵琶「虎」は修理完了しましたということだった。琵琶「仙家」を持つてくる使者に託して、琵琶「虎」をお戻ししますと連絡してきた。

※部類記（ぶるいき）…日記から特定の事柄だけを抜き出して編集したもの。

七日、晴。後小松上皇様からまた御書状が届いた。他の部類記も送ってほしいとの仰せだった。それで御移徙部類記九巻一帙（※）、御次第一帖を送った。御移徙部類記は三帙あるのだが、問題があるので、まず一帙だけを送った。

※帙（ちつ）…書物を包んで保存する覆い。

景德伝灯録

八日、晴。夕方、指月庵へ行った。このところ、指月庵に周乾藏主が

お出でになっている。大光明寺長老が景德伝灯録（※）を講義なさっている。それをお聞きになるために、指月庵に滞在なさっているそうだ。酒樽を持つて行つた。椎野寺主・田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・慶寿丸もお供してきた。酒宴の後、和漢連句（※）を懷紙一折り分やつてから、午後十一時に帰った。

※景德伝灯録（けいとくでんとうろく）…多くの禅僧の伝記が載せられた、景德元年（一〇〇四）編纂の中国禅宗の歴史書。日記原文には「前灯録」となっている。

※和漢連句（わかんれんく）…和句（五七五または七七）と漢句（五言または七言）を交える連句。発句が和句であるのを和漢、漢句であるのを漢和という。

治仁王の急逝に関するうわさ・落書

九日、雨が降った。伏見荘の村人たちの間で、春から流行病が蔓延していて、いまだ収まらないようだ。その病氣退散の祈祷のため、法安寺の良明房を呼んだ。仁王経を読ませた。

まだ治仁王死去に関するうわさはなくなっていないらしい。そのことを書いた落書（※）があるようだ。伏見宮家の皆で双六を打つた（※）。その後、酒宴をした。

※落書（らくしよ）…時事問題などを風刺や批判をした匿名の文書。人目に付きやすい場所に貼り付けたり、道に落として置かれた。

※「双六を打つた」…原文は「賽を打つ」である。

十種香

十三日、晴。十種香（※）を聞き当てる会に賞品をだした。椎野寺主が酒宴を主催してくれた。

※十種香（じっしゅこう）：組香の一。三種を三包ずつと一種を一包の合計一〇包の香木を順不同にたき、その香りを聞き分けるもの。

雲脚茶会

十四日、晴。台所で雲脚茶会（※）を始めることにした。侍臣・局女・身分の低い男共も大勢集まり、幹事役を順番に廻すことにした。これは毎年のことである。

さて伏見御所旧跡にある庭石などを退蔵庵から大勢の人夫を出して、引き取りに来たという。亡くなった御所様・大通院の時代に、庭石を下さいとお願いして許されたので、取りに来ましたという。しかし、事前に何の断りもなかったので、滝頭の大石などは取ってはいけないうと小川禅啓を通して命じた。滝頭石を除いて、大石十三個を取りますという返答があった。

※雲脚茶会（うんきゃくちゃかい）：粗茶による茶会。雲脚とは、浮雲が足早に去るように、茶あわが早く消える粗悪な茶の意という。

貞成のひがみ

十六日、朝にわか雨が降った。台所で順番に幹事を廻す茶会を開いた。また行蔵庵でも茶会があつて、寿蔵主が当番だったそうだ。毎日、賑やかなことだ。私としては暇以外の何ものでもない。侍臣たちは私のことを何も考えていないのだろうか。

【頭書】（Ⅱ日記の上方の隙間に書き加えた記事）後で聞いたところによると、非茶（※）で行った幹事当番制の茶会は、行蔵庵で寿蔵主が特に思い立って行つたものらしい。

文書箱を大光明寺へ預ける

『御記』などを入れた箱十二個を大光明寺へ預けた。これらは、

特に大事な品々である。

※非茶（ひちゃ）：本場で栽培した以外の茶のこと。室町時代では宇治茶以外の茶をいう。

マラリア再発

十七日、晴。お昼頃に風邪のような症状がでて、とても苦しかった。もしかしたらマラリアかもしれない。この前の十五日にもちよつと体調がおかしかつた。不審なことである。

十八日、今日の明け方に病状がよくなった。これはやはりマラリアに違いない。

マラリア落としの弘法大師御筆

十九日、晴。良明房が来て、マラリア退散の祈禱をしてくれた。その他にも、弘法大師の御筆などを灑いだ水を飲んだりした。不動明王・愛染明王の法会を一回、良明房が勤めてくれた。午後三事前にマラリアが再発した。とてもひどい病状だ。散々な目に遭つた。

マラリア落としの算木

二十日、晴。明け方からマラリアの症状が収まった。さて退蔵庵の僧が算木（※）でマラリアを治すという。病人の年齢とマラリアが発症した最初の日を書いて渡して下されば、マラリアを落としてさしあげますという。田向三位が勧めるので、それぞれの数字を書いて渡した。

※算木（さんぎ）：占いや計算に用いる木札。

二十一日、雨が降った。明け方、良明房が来て、加持祈禱をしてくれた。また退蔵庵の僧が算木を使ってマラリア治しをしてくれたという。昼頃から再発したが、夕方には治まった。もしかしたら治りか

けているのかもしれない(※)

※「もしかしたら治りかけているのかもしれない」：原文には「もしくは影か」とある。

二十三日、晴。夕方、にわか雨が降った。良明房が来て、加持祈祷をしてくれた。気分はまだよくないが、マリアの発作は起きていない。もう今は治ったのだろうか。いづれにせよ、すべては、良明房の祈祷とあの僧の算木の効き目であろうか。尊ぶべき法力であり、かつまた、うれしいことである。

二十五日、昼にわか雨が降った。風呂に入った。気持ちが晴れ晴れしくなった。

二十六日、晴。今夜、京の北大路あたりで騒ぎがあったらしい。強盗だそう。

即成院へ強盗乱入

二十七日、晴。昨晚、強盗数十人が即成院に押し入り、院主や善基らの寮などへ乱入した。衣装や道具などをすべて奪い取ったという。それなのに、強盗を一人も討ち取らなかつたらしい。内部で強盗を手引きする者がいたのだろうか。

即成院へ預けて置いた、古記録が入った箱は、一つも取られなかつた。これらの箱には古い反古紙が入っているに過ぎないと内部事情を知っていた者の仕業であることは、まちがいあるまい。庭田重有朝臣を使者にして、驚きましたと即成院を見舞わせた。

近衛局の腫れ物治る

さて近衛局の腫れ物は、無事治った。今日、病気が治ってはじめ、近衛局は風呂に入ったそうだ。医師である大光明寺の僧へ褒美

を与えた。私が助成して、褒美を逃えたのである。

近衛局は私の前に来て、「何日間も部屋に籠もっていましたのととても不安でしたが、なんとかご挨拶に出ることが出来ました」と言ってきた。めでたいことである。祝宴を開いた。

二十八日、晴。室町殿が上皇御所へ行つたという。上皇御所での茶会で、上皇様が幹事役をお勤めになったので、室町殿をお呼びになった。それで、上皇御所へ行つたそうだ。

六月一日、晴。「すべてのことがめでたい」と予祝した。朝早く愛染明王堂にお参りした。椎野寺主・田向三位以下を連れて行つた。

宇治川の船遊び

さて船遊びをした。田向三位に準備させた。午後三時に船を出した。私・椎野寺主・田向三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・田向三位の息子である阿賀丸・重有朝臣の息子である慶寿丸・寿蔵主、そして村人の小川禅啓・行光・広時ら数人が乗った。宇治川の河上遙か遠くに漕ぎ出させ、漁師に網を打たせて魚を捕った。しかし魚は捕れなかつた。簀巻きを沈めてみたが、それでも魚は捕れなかつた。珍しいことだ。しかし魚取りの様子は風情があつて、目を楽しました。

土倉の宝泉

土倉の宝泉が来た。田向三位が呼んだのだ。宝泉の息子二人と僧侶二人も一緒に来た。一献のお酒を持ってきた。船中で酒宴をして、面白かつた。即興の連歌をした。私が第一句を詠んだ。特別に命じて宝泉に第二句を詠ませた。第三句は三位が付けた。

その後、無礼講の酒盛りとなった。音曲や乱舞があつた。宝泉の

子供たちの舞が上手なのは、天性の才能だろう。三位が盃を傾けた折に、子供たちは上手に舞の袖を翻した。それで三位が褒美の太刀を父親の宝泉に与えた。そのお返しに宝泉は太刀を長資朝臣に差し上げた。村人たちも乱舞をして楽しんだ。宝泉がこのような席に顔を出すのは初めてのことだ。名誉なことであろう。夜になって、帰った。

酒樽を持ち帰って、宮家の女性たちへのお土産とした。それでもた御所で酒盛りとなった。村人たちも庭で乱舞をした。皆ひどく酔って、それぞれ帰っていった。

二日、晴。椎野寺主が寺へ帰った。数日間、伏見に滞在していた。自分の寺をほったらかしているのはよくないことであろう。冷泉正永が来た。正永が昨日来られなかったのは、残念なことだ。

即成院強盗事件の起請文

さて、即成院の盗人について捜査をさせた。伏見莊全体、殿原（※）・寺庵・人供行者（※）・村人たちなど、すべての人々を御香宮に集めて、神前で起請文（※）を書かせた。その場で起請文の失（しつ）が出た者を捕まえようと準備していた。しかし、特に失が出た者はいなかった。まずはよかった。七日間の間、失が出た者を処罰しよう。

※殿原（とのぼら）：村落で「〇〇殿」と呼ばれる有力者。地侍。

※人供行者（にんくぎようじゃ）：寺の修行者であろうが、未詳。

※起請文（きししようもん）：ある事柄に対する誓約書。虚偽があれば、神の罰を蒙るものとされた。その罰のあらわれとして、鼻血を出すなどの失（しつ）が出るものと考えられていた。

三日、晴。綾小路信俊前参議が来た。このところ来ていなかったので、

うれしかった。すぐに音楽会をした。黄鐘調の曲七つと朗詠などをした。田向長資朝臣が笙を吹いた。音楽会が終わって、酒宴を開いた。四日、晴。朝早く音楽会をした。太食調の曲七つと朗詠二首をした。綾小路前参議と田向長資朝臣が参加した。

名笛「王余魚」

さて「王余魚」という笛の名器は伏見宮家秘蔵の楽器である。綾小路前参議は「ある事情から自分の笛を持っていないので、しばらくの間、王余魚を私にお預け下さい」と申し出た。物ねだりだと分かってはいたが、預けておくことにした。

五日、晴。朝早く音楽会をした。高麗の曲七つを綾小路前参議に吹かせた。

さて台所での雲脚茶会は、今日で幹事の当番が一巡した。今日は寿蔵主が当番だ。谷河井あたりに飯の会所を作って、いろいろと飾り立てたそうだ。その後、風呂に入って、無礼講になったらしい。

治仁王形見の唐絵

冷泉正永が朝早く帰った。正永には葆光院の形見である中国の絵二枚を与えた。

夕方、また音楽会をした。盤渉調の曲五つと朗詠などをした。田向長資朝臣も参加した。音楽会が終わって、綾小路前参議がちよつとした一献の酒宴を用意してくれた。

六日、晴。朝早く一越調の曲五つと朗詠などをした。音楽会が終わって、綾小路信俊前参議は帰った。

鎮宅の法

聞くとところによると、新築の上皇御所へ今度の十九日にお引越

さるそうだと。それで、今夜から「鎮宅の法」という新築の家屋に移る際の密教の呪法が執り行われたという。その導師は、妙法院宮堯仁親王が勤めたそうだと。

七日、京都・祇園社の祇園祭の様子を、関東からの使者が見物したという。田向長資朝臣は、上皇御所の鎮宅の法の儀式で、今夜、灯火を持つ役を勤めるそうだと。

今出川公富、中納言に昇進

八日、晴。今出川公富参議兼近衛中将が中納言に昇進したと連絡があった。めでたいことである。

九日、晴。今出川家に公富中納言昇進お祝いの使者を派遣した。長資朝臣が、上皇御所の鎮宅の法の儀式で、灯火を持つ役を勤めたそうだと。麻の狩衣を着たらしい。

十日、晴。長資朝臣が帰ってきた。鎮宅の法は厳めしい儀式だったと語っていた。灯火を持つ役の殿上人は六人で、皆、麻の狩衣を着ていたそうだと。

光台寺の風呂

十一日、晴。光台寺に行き、お風呂で沐浴をした。光台寺住職のお部屋に招かれた。田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・慶寿丸も一緒だった。軽食など丁寧なおもてなしだった。その後、三献の酒宴が終わってから、お部屋を出た。

この光台寺での入浴は、父・大通院の時代から毎年一度恒例となっている。私の代になってからは、初めてのことだ。

中納言昇進の先例

今出川公行左大臣から書状が届いた。今出川公富が中納言に昇進

したことに、先例があるという。文永三年（一二六六）十月、西園寺実材（※）が中納言に昇進した。その翌月十一月、富小路殿へのお引越に、西園寺は供奉した。その先例に基づいて、公富の昇進を打診したところ、問題なく朝廷からお許しが出たという。

この昇進に関する執行責任者の公卿は大炊御門宗氏大納言、藏人は勧修寺経興右少弁だそうだと。

※「西園寺実材」…原文では「後西園寺」とある。

御前船の酒

十二日、晴、夜に大雨が降った。田向三位が、酒入りの大甕と瓜などを持ってきた。御前に置いた舟型の箱にこの酒を入れるのが、当番の役ということだった。毎年、この行事があるという。

今年はまだ誰もやっていないので、田向三位が準備したという。神妙である。今日は仏事のために身を淨めていたが、この一杯の酒で精進を落とした。

次郎の自白

十三日、雨が降った。朝早く田向三位が来た。即成院の盗犯が誰だか判明したという。次郎という名の者が自白したらしい。

その男が言うには、「犯行は、三木助太郎善理の弟である三木三郎の仕業だ。『即成院是明房は密通をしているので、打ち殺してやりたい。そのついでに、即成院主や善基らの財産も奪い取ろう。よろしく頼む』と三木三郎が言った。その二三日後にまた三郎が来て言うことには、『俺は、下野良有の弟で卿と呼ばれている有慶の使いで来た。今回のこと、よろしく頼む』とのことだった。もしこの件に合意しなければ、三木三郎は承知しないぞという様子だった

（※）。それなので、とりあえず承諾しておいた。

しかし即成院へ乱入する時は、私は一緒に行かなかった。その後、犯人捜査が厳しく行われたので、口封じのため、私・次郎を殺すことだろうと思った。これは逃れられないので、このままでは殺されるしかない。それで「自首しました」ということだった。「神様に誓って、最初は犯行に同意しましたが、実際には一緒に盗みをしていません」と言ったという。

有慶の自首

それで有慶をすぐに呼び出して問い質したところ、三木三郎は有慶も犯行に誘ったという。やはり有慶も次郎も三木三郎に同意していたことは、もちろんである。しかし、事件当日は有慶も次郎も犯行に従わなかったと強く言い張っている。

また去年十二月十日、楊柳寺へ盗人が押し入った。これも三木三郎の犯行だという。

即成院の盗犯は、三木善理の弟・三木三郎

いろいろと自首が揃ったので、三木三郎に関して、兄の三木助太郎善理に対し、「三木三郎が盗人であることが判明した。三郎の身柄をこちらに寄こしなさい」と命じた。ところが三木善理はうやむやな返事しかせず、さらには「三郎は外出していて不在です」と言うてきた。

かくなる上は、強制的に逮捕しようと伏見荘の役人たちは話し合ったそうだ。自首した有慶・次郎の兩人に対しては、まずは起請文を書かせるようにした。それで御香宮で兩人は起請文を書いたという。不思議なことであり、到底許しがたい事件である。

※「承知しないぞという様子だった」：原文は「定遅致しがたき体なり」である。意味が通らないので、無理があるが「定遅」を「承知」と解した。

船水納涼

十四日、晴。京都で祇園祭が行われているという。順番で船に水を溜めて夕涼みをする会合をおこなった。今日の当番は、対御方・近衛局・我が妻である今参局庭田幸子である。祇園祭の内祭も兼ねて行った。

三木三郎の金打

さて盗犯のことだが、昨夜、三木助太郎善理が小川禅啓の家に来て、次のように話したという。「三郎のことについて不審に思ったので、三郎にいろいろと尋ねたところ、即成院に押し入った盗犯は次郎と有慶が張本人で、彼らが三郎を誘ってきたのだという。そして三郎が張本人ではないことを、金打（※）をして誓った。たとえ起請文を千枚書かされたとしても、何も痛みはしない。だから三郎を連れて侍所へ行くつもりだ。その時、訴人である有慶や次郎も侍所へ出させて、対決させるべきだ」と話した。

これは良い考えなので、他の関係者も同意して、侍所で対決させることに決めた。

即成院善基の証言

また即成院の善基が言うことには、「その夜、強盗集団のなかに、三郎がおりました。三郎を見知っていましたが、あまりに恐ろしかったので、今まで黙っておりました」という。これで既に証人の証言は明確になった。この善基も一緒に連れて侍所へ行きますと、田向三位が報告してきた。

※金打（きんちよう）…刀の刃と鍔（つば）を打ち合わせるなどして音を立て、自分の意見が正しいことや約束を違えないことなどを誓った慣行。

十五日、雨が降った。今日、あの白状人である有慶・次郎兩人を侍所に連れて行くが決まっていたのに、三木善理は明日にしてほしいと言ってきた。とりあえず田向三位が先に京都へ出かけた。

三木三郎出頭せず

十六日、晴。朝早く、伏見荘の役人である小川禪啓・小川有善・広時らが有慶と次郎を連れて、侍所所司代である一色のところに出かけた。三木三郎も同じく出頭すると三木善理は言っていたそうだが、ところが伏見荘の役人たちが侍所で待っていたのに、三木三郎は来なかった。夕方になっても、とうとう来なかった。

一色侍所所司代の見解

田向三位が侍所所司代の一色にこの事情を説明したところ、「三木三郎の犯行であることは間違いない。そうであれば出頭しないのは当然だろう。いずれにせよ、上皇御所のお引越が終わった後に、伏見へ行つて、三木三郎とその仲間を逮捕しよう」と一色は言ったそう。

訴人の有慶と次郎を侍所に預けておくべきであるが、一色は「彼に不審なこともないので、当方で預かる必要はない。まずは彼らの身柄をそちらにお返しする」と言った。

三木善理の反抗

それで、兩人を受け取って伏見へ戻ってくる途中、深草あたりで警告しにきてくれた人々に出会った。彼らは「三木善理ら悪党ども

が無垢庵に集まって、軍勢を率いて、松原辺りで待ち伏せしている」と知らせてくれた。それで、「伏見荘の村人たちに応戦の準備をするように連絡しに行きなさい」と彼らに命じた。

そうしたら、松原あたりで三木善理ら三人が走り寄ってきて、「あまりにも不名誉なことなので、お迎えに参りました」と言った。この三木善理らの言葉を無視して、ともかく馬に鞭を打って戻ってきたということだった。

この小川禪啓たち役人たち一行が伏見に戻ってきて、以上のような状況を報告してきた。とてもひどい話だ。

まず無垢庵に人を派遣して立て籠もっているという悪党どもの様子を偵察させたところ、皆どこかへ逃げ去ったようで、今は誰も居ないとのことだった。この事に関して、三木三郎らを逮捕するかどうかわけると会議をした。翌日の明け方になつて逮捕することで、役人たちの意見が一致した。

貞成の考え

私がつらつらと考えてみるに、このところ京都の要人はみな上皇御所のお引越の件にかかりつきりである。山城国内のことであつても、こういう晴の儀式前なので、わざわざ悪人を捕まえるのは、いささか穏便でない。もし傷害事件や殺人事件でもおこった日には、治安責任者としては面目が立たなくなることだろう。

三木は畠山の家臣

そのうえ、三木善理は畠山に仕えているので、訴訟したとしても、畠山が室町殿へ嘘偽りを報告するのは目に見えている。一昨年、三木と一善康が合戦した事件（※）でも、そういう状況だったから、

その轍（わだち）を踏まないようにすべきだろう。

さらには、侍所所司代は、上皇御所のお引越が済んだら、三木三郎を逮捕しようと言っているのだ。だから侍所の出勤を待たず、私的に盗人を逮捕するのはよろしくなからう。そう思ったので、「明日、三木三郎の逮捕に向かうのは、とりあえず中止しなさい」と田向三位に命じた。

田向経良の反論

しかし、伏見荘で盗人を逮捕することは、室町殿の権限の範囲外だと田向三位が反論したので、それ以上重ねて、中止を命じることにはしなかった。

※「三木与一善康が合戦した事件」：応永二十三年四月二十三日条を参照のこと。

三木一族の屋敷を焼き払う

十七日、朝、にわか雨が降った。三木三郎らは伏見荘あたりに潜んでいるらしい。三木三郎らを逮捕してもいいか侍所所司代に重ねて打診したところ、「犯人はいまだ見つかっておりませんので、そちらで捕まえていただいて、身柄をこちらにお送り下さればありがたいです」とのことだった。

それですぐに伏見荘の役人たちが三木家に向かったところ、皆、どこかに逃げ去っており、家はおぬけの殻だったという。残されてあった財産などを没収して、運び出した。三木家の女性や子供たちも皆、どこかに逃げ去ったという。三木与一善康ら盗犯に味方していた者たちの家は、小屋に至るまですべて焼き捨てさせた。

貞成の主張

三木善理の家に火を懸けるべきかどうか、話し合った。話し合いの中で、「三木善理は御香宮の神主である。畠山家の家臣でもある。それに今回の盗犯の張本人ではない。ただ盗犯の一族として、三郎をかばったに過ぎないのではないか。そして既に伏見荘から家財を捨てて逃げ出しているのだから、罪は一段軽いはずだ。むやみに三木善理の家に火を付けるといふのはどうだろうか」と私は主張した。でも皆は放火すべきだと言い張って、三木善理の家も焼き捨ててしまった。

三木三郎を逮捕した者に褒美をだすと村々に伝達する

近隣の村人たちも集まってきた。「あの三木三郎ら盗人たちを捕まえてきた者には褒美をあげるぞ」と近隣の村々に伝達した。

さて畠山にこの事件のことを伝えるべきだという意見がでた。田向三位が私の書状をもって畠山へ向かうと言いつ出した。

ともかく、まずは当座の問題は無事解決した。皆が集まってきたので、小川禅啓たちにご褒美の酒を振る舞った。

十八日、晴。三木助太郎善理が管理している無垢庵は寺庵なので、放火するのはよろしくない。それで建物を解体して、即成院へ寄付することにした。もともと盗人は即成院の調度品や道具類を盗んだので、特に寄付することにしたのだ。今日、無垢庵を解体して、即成院へ運び入れた。

さて田向三位が畠山の屋敷に向かった。取り次ぎ役を通して詳しく説明したところ、畠山はこのことで怒っているとの返事だった。三木善理からも同じく畠山へ訴えているようだ。三木善理の言い訳

は、黒を白に言いくるめている議論だ。何度も言い合いをしたが、いずれにせよ、明日の仙洞御所お引越の後に決着をつけようとの返事だった。それで田向三位は帰ってきたという。

周乾蔵主・惣得庵主・退蔵庵主・指月庵主・瑛侍者ら、客人が大勢やって来た。皆、この事態に驚いていた。

穢れた車寄せを作り替える

さて、大工の源内次郎が来た。門のところの車寄せを取り替えることにした。この車寄せから父・大通院のご遺体をお出ししたので、車寄せが穢れてしまった。先例があるので、陰陽師の賀茂在弘に占わせたところ、「今日、作り替えるのがいいでしょう」と返答してきた。それで、今日、源内次郎に作り替えさせたのである。

上皇御所の引越

十九日、明け方、にわか雨が降り、雷が鳴った。朝になったら雨が上がった。ただし黒雲はまだ重苦しい。今日、東洞院の新仙洞御所へお引越があった。午後五時三〇分、出発なさった。準備は万端で、厳めしい行列だったらしい。行列に付き従った人々は誰なのか、参列者名簿をみて別紙に記録しておこう。

攤賽(※)は省略なさったそうだ。水火童(※)・黄牛(※)などを行った。文永三年(一二六六)十一月の富小路殿へのお引越が良い先例だそうだ。大がかりな国家事業が無事終わって、喜ばしいことだ。

後で聞いたところだと、室町殿は、上皇御所お引越しの儀式途中で早退なさったそうだ。富樫満成兵部大輔の屋敷が新築され、やはり十九日の夜に引越した。それに立ち合うため、早退なさったら

しい。

※攤賽(ださい)：双六を打つことか。実際には賽子(さいころ)を筒にいれて目を出すだけの儀礼らしい。日記原文で賽は竹冠に塞。なお縁起をかついで、この賽子はすべての目が六となっている特注品だったらしい。「六位よりまた参進して攤賽す、博陸(はくりく、関白のこと)毎度賽を取りて筒に入らしめたまう」、「左衛門中将参進して賽を擲(なげう)つ、上首関白殿賽を取りて毎度筒に入れたまう、公卿下臈より次第にこれを擲つ」、「賽と筒を召す、(中略)賽は皆、六目なり」、「攤を打つ」(『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記』上・下、二一四・二〇三・一五六・三六二頁)。なお部類記原文の賽には竹冠が付いている。

※水火童(すいかわらわ)：手洗椀(てはんどう。湯水を注ぐ器)を持つ童と松明を持つ童か。水取童女と火取童女。

※黄牛(あめうし)：紺色の牛。上等な牛とされた。水火童と黄牛は移徙の際に先例としておこなわれた儀礼らしい(『法住寺殿御移徙部類』永暦二年四月上皇移徙、『続群書類従』四上。繁田信一『陰陽師と貴族社会』、吉川弘文館、二〇〇四年、一九八―一九一頁)。

惠舜蔵主の死

二十日、晴。父・大通院の子である惠舜蔵主が午後一時にお亡くなりになった。去年から脚氣がひどくなり、日を追うごとに病状が重くなっていった。今では生きているのが不思議なくらいの状況だった。内々の事情を知っていても、亡くなったその時になれば、やはり戸惑うものである。とても悲しい。母である対御方とても悲しんでおられることは、いうまでもない。

対御方のお子さんに三人の僧侶がいたが、いずれも皆お亡くなりになってしまった。この惠舜藏主が最後まで残ったお子さんだったが、またこのような事になってしまった。母としては不運なことである。私としても兄弟が次第に少なくなっていくことに、落胆している。惠舜藏主の葬儀と供養は、禅照庵で行うことになった。寿藏主がすべて取りはからうとのことである。

触穢を防ぐ方策

去年より事情があつて、惠舜藏主は宝藏院の塔頭（たっちゅう）に住んでおられた。ここで惠舜藏主が亡くなった。この宝藏院は伏見荘内であり、また御所の近所でもあるので、いろいろと問題が出てくる。それで秘かにご遺体を禅照庵へ運び出した。御所中が触穢状態にならないようにするためである。寺庵の僧尼たちがお見舞いによつて来た。

畠山の怒り

田向三位が帰ってきた。上皇様のお引越の行列を見物しており、その様子を話してくれた。さて畠山の返事だが、「事前に連絡もなく、三木が処罰されました。既に処罰してから当方へ連絡をするというのは、納得できません。改めて室町殿のご意向を伺つて、その後にこちらとして対処します」ということであつた。一日中、取り次ぎ役と話し合ったが、畠山の当主はとても怒っているようで、話にならない状況だつたという。

伏見荘下司職

二十一日、晴。伏見荘下司職の半分は、広時が伝え持っているという。それで残りの半分についても、広時が欲しいと言ってきた。

この事については、以前、退藏庵主と詳しい話をした。「伏見宮様の命令書がいただけるものならば、残りの下司職半分をこの退藏庵とご契約下さい」と言ってきた。下司職半分を持っていた三木善理が没落した今となつては、命令書を出して下司職を退藏庵と契約すると、私も承諾した。もともと退藏庵と下司職半分の契約するのは、ちょうど良い巡り合わせなので、何も問題はあまい。それに退藏庵に下司職を預けるのが、伏見荘が平和に安定する基盤にもなる。それで女房奉書の書式で書いた下司職の契約状を書き与えた。また田向三位も添え状を書き与えた。退藏庵主は、恐れ多くありがたいことだと申した。

伏見荘の役人たちが一献のお酒を献上してきた。伏見荘が平和に落ち着いたことに対するお祝いのお酒だという。

性見庵

またかつての三木与一騒動の時、三木善理が性見庵を乗っ取つて、住職である昌訓を追い出していた。そこで昌訓は性見庵に戻りたいと願ひ出てきたので、戻ることを承認する命令書を与えた。

二十三日、田向長資朝臣を通して、後小松上皇様へお引越が無事終わったことへのお祝いを申し入れた。勾当局にも同様に書状でお祝いを申し述べた。室町殿へも、常宗を通して、お祝いを申し入れた。今夜、上皇御所で仁王会（にんのうえ）が行われるそうだ。

三木一族からの没収地

二十四日、晴。「三木一族から没収した領地の半分を、私にお預けください」と田向三位が望んできた。半分というのは高望みであるが、この事件での田向の心労やこれまで田向に預けていた御恩地がた

いした物ではないことも考えあわせ、「問題がないので、よろしい」と返事をした。そしてすぐに命令書を書き与えた。

長橋局・藤原能子殿が一献のお酒を少し送ってきた。すぐに飲んだ。冷泉正永が来た。

二十五日、晴。三木一族から没収した領地を少しであるが、蔵光庵へ寄付した。綾小路信俊前参議が来た。

二十六日、晴。田向三位が京都へ出た。盗人の事件について、富樫満成兵部大輔に詳しいことを報告するためである。

惠舜藏主は正親町三条公雅の養君（やしないぎみ）

正親町三条公雅中納言兼大宰権帥が来てくれた。思いがけないことで、うれしかった。正親町三条はかつて惠舜藏主を主君として養い育てた関係にある。亡くなった惠舜藏主を追善供養するため、伏見に來たのである。

すぐに対面した。酒宴で特に三献の盃を勧めた。伏見には初めて來たという。特別なご馳走でもてなすこともできず、残念である。夕方、正親町三条は出ていった。冷泉正永も帰っていった。

三木没収地処理の根回し

二十七日、晴。田向三位が戻ってきた。富樫の屋敷へ向かい、富樫に直接会って、盗人の事件について詳しく報告したという。富樫は「室町殿へきちんと報告いたします。ないがしろにはいたしません」とのことだった。酒代の錢三貫文と鯉などを渡したら、喜んだそうだと。侍所所司代へも酒代を送っておいだ。松木宗量前中納言にも酒代を送った。松木は細川満元管領の縁者なので、この件について口添えしてもらったためである。

諸方へ贈った酒代の心付けは、領主として私が行ったものである。ところが、三木一族からの没収地に関して、領主である私に入る利益は何もない。ただこのように出費がかさんで、経済的に苦しくなるばかりである。

御前船の酒宴

寿藏主が当番で幹事役を勤める御前船の酒宴(※)のためだといって、お酒を一献分、持参してきた。即成院主梵基と同院の善基も一献のお酒を持ってきてくれた。軽食なども丁寧を用意してくれた。これは、無垢庵の建物を即成院へ寄付したお礼のお酒だという。一献の酒宴が重なり、無礼講の酒盛りになった。綾小路信俊前参議や田向三位ら大勢が酒宴に参加した。

※「御前船の酒宴」…応永二十四年六月十二日条を参照のこと。

二十八日、晴。三木一族からの没収地のうち、少しの分を慶寿丸に御恩地として分け与えた。三木与一合戦の時、没収地となっていたものを父・大通院が慶寿丸に下された土地がある。それもまた改めて御恩地として承認してやった。夜に酒宴があった。侍臣たちが主催したものだそうだと。

二十九日、晴。三木一族からの没収地のうちには、御所侍の石立ら村人たちがもともと持っていた名田が含まれているそうだと。三木善理たちが不法に押し取っていた名田なので、元の持ち主に返還し、その領地経営を保証してくださいと、小川禪啓たちが望んできた。それで保証書を書き与えた。その御札に皆々がお酒を献上してきた。

服喪中の六月祓え

三十日、昼にわか雨が降った。いつものように風呂に入った。六月

祓えの日だが、服喪中なのでやめた方がいいのだろうか。先例がわからないので、陰陽師の賀茂在弘卿に尋ねたところ、問題はありませんとの回答だった。それで綾小路信俊前参議が茅輪を作ってきてくれた。お祝いの儀式があつた。

さて先日、田向長資朝臣を使者にして上皇様へお引越が無事済んだことのお祝いを申し入れた。しかしお取り込み中だったので、冷泉永基に伝言しておいたままだった。今日、そのお返事があつた。「このようにお祝いのお言葉をいただいて、うれしく思っています。なんとか引越の後片付けが済みましたら、お返事の手紙を差し上げたいと思っています」というお言葉だったそうだ。行き届いたお返事で、恐れ多いことである。

蔵光庵に、三木の没収地のうち二反分の土地を寄付した。そのお礼に蔵光庵主が来て、酒宴分の錢を献上してきた。

今出川家嫡子の早世

さて聞くとところによると、今出川公富中納言の二歳になる嫡子が明け方に亡くなったそうだ。祖父である今出川公行左大臣の悲しみは、言葉にできないほどであろう。とてもかわいそうだことだ。故東坊城長頼朝臣の娘が産んだ子であり、特にかわいがっていた子であつた。

七月一日、晴。「初秋でめでたい兆しがある。とても幸せだ」と予祝した。いつもの通り、月初めのお祝いをした。

綾小路信俊に領地を与える

三木一族からの没収地のうち、少しの土地を綾小路信俊前参議に御恩地として与えた。このことを記した女房奉書を書き与えた。綾

小路の伏見宮家勤務が他よりも優れているので、多少ではあるがその気持ちを表したまでである。「特に恐れ多いことでございます」と言つて、綾小路は退出した。

山崎超願寺に参詣する

夕方、山崎の超願寺にお参りした。周乾蔵主が同寺にいらつしやり、招待して下さつたからである。一献の酒宴を丁寧に着意してくださり、楽しんだ。田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・慶寿丸も参加した。小川禅啓ら村人たちも大勢、酒宴に参加した。一献が終わつて帰つた。帰り道に、三木一族の屋敷の焼け跡を見た。

文書や琵琶を寺や土倉に預ける

五日、晴。法安寺へ文書箱十七個を預けた。天皇直筆の日記など大切な物ばかりである。

また柞（ゆす）の木で胴体を作つた琵琶一面を土倉の北蔵に預け置いた。

七日、晴。夕食時に小雨が降つた。七夕の梶の葉のお祭りは、服喪中なので省略した。ただ草花を生けた花瓶を五く六つ、特に飾つた。生け花はいろいろな人から献上されたが、その詳細は省略する。ただ光台寺から花瓶二つが献上されたことだけ特記しておく。

下司の七夕奉仕

七夕御節供の準備を下司の広時がしてくれた。これは昔から、下司の役目として定め置かれていた。ところが最近、三木善理が下司職を勤めるようになってからは七夕の奉仕を怠つていて、中絶の状態だった。広時を下司に任命してから、昔からの先例として七夕節供を勤めさせた。喜ばしいことだ。風呂に入った。その後、節供の

お祝いをした。

新築の仙洞御所では、花合（※）をなさったそうだった。また御所で音楽会をなさったという。

※花合（はなあわせ）…左右に分かれ、花を持ち寄って比べ、その花を和歌に詠んで、優劣を競う遊び。

八日、晴。今日から心身を淨め行いを慎むことにした。そして孟蘭盆経を読んだ。

豊原郷秋が来た。恵舜蔵主が亡くなったので、音楽会はず、ただ雑談をした。上皇御所での七夕や音楽会や花合などが公卿たちの座で行われたそうだった。上皇御所の音楽会は、明け方から始まったという。盤渉調の曲、採桑老・万秋楽破・蘇合急・秋風楽・白柱・輪台・青海波・千秋楽などを演奏したそうだった。演奏者は、大炊御門信経前中納言たちだったそうだった。毎月定例の上皇御所音楽会のメンバーは皆、この七夕の音楽会に参加したそうだった。ただ今出川公行左大臣だけが欠席したらしい。追加メンバーとして松木宗繼朝臣が参加したそうだった。上皇御所の音楽会で松木が笙を吹くのは、初めてのことだそうだった。

上皇御所音楽会での衣装トラブル

さて、この音楽会の場に、中院光相少将が狩衣を着てきた。公卿・殿上人は皆、直衣か衣冠を着ている。しかし中院光相ただ一人だけが狩衣だった。

音楽会を始めるにあたり、皆が着座した時、上皇様が中院の服装をお気づきになった。それで松木宗量卿を通して、狩衣はよくないので退場しなさいと中院にお命じになった。中院は「前もって四辻

季保朝臣に尋ねましたところ、『内々に上皇御所へ問い合わせたところ、狩衣でもかまわないとの指示があった』との回答でした。それで狩衣で来たのです。自分勝手に狩衣を着てきたわけではありません」と言い張った。重ねてご指示があり、「あとで四辻季保朝臣に事情を尋ねるが、まずは退出しなさい」とお命じになった。それで、中院光相は座を立った。

後小松上皇、四辻季保を譴責する

音楽会が終わって退出する時、中院は季保朝臣の袖を引っ張って、言い争いになった。さらには季保朝臣に暴言を吐いたそうだった。どうも、季保朝臣は事前に上皇様のご意向を聞きもせず、自分勝手に狩衣でもいいだろうと中院に言っただけらしい。

後日、上皇様は季保朝臣を譴責なさった。上皇様はとても怒っていらっしたそうだった。

豊原郷秋、領地を要望する

豊原郷秋が三木の没収地の一部を私にも下さいと言ってきた。しかし、没収地はすべて配分先の約束が決まっているので、だめだと断った。

十二日、晴。豊原郷秋が来た。三木の没収地が欲しいとのこと、今出川公行左大臣の推薦状をもらい、また頼みにやってきた。前にも無理だと返事をしたのに、またこのようにやってくるのは、けしからんことだ。しかし今出川左大臣の推薦状は無視できないので、「なんとか適当な領地を与えよう」と記した書状を与えた。

十三日、晴。陽明局が京都へ出かけた。お墓参りをするのだという。夕方、宝蔵院の塔頭で施餓鬼があった。大光明寺の維那（※）ら

僧六人で執り行つた。寿蔵主が準備をした。

宝蔵院は尼寺なのだが、トラブルがあつて、昨年から男の禪僧も宝蔵院に住んでいる。感心しないことだ。

勝阿が来たが、すぐに帰ってしまった。

※維那（いの・いのう）：寺務をつかさどる役の僧。いな。

盂蘭盆供養

十五日、いつものように、蓮の葉飯でお盆の供養をした。

夕方、大光明寺の施餓鬼に参列した。まず指月庵へ行つた。そして施餓鬼の開始時刻近くになって、大光明寺へ行つた。地藏殿で長老と会つた。干し飯やお茶菓子などを振る舞われた。侍臣たちも同じく食べた。そして山門脇の参列席に座つた。宮家の女性たちも同じく参列席に座つた。施餓鬼が行われた。

施餓鬼の終了後、仏殿で焼香した。つぎに先祖の墓標や御廟の前に水をお供えし焼香してから、帰つた。

夜に石井村の念仏のお囃子をお忍びで見物した。

陰陽師・土御門泰家の死

十六日、晴。惣得庵主が来た。数時間お話しをした。

聞くところによると、陰陽師である土御門泰家三位が今日亡くなつたそうだ。後小松上皇様や室町殿のためにご祈祷をするなど、陰陽道の権威者で家も富み栄えていた。私が幼少の頃、私専属の陰陽師として占いなどをしてもらった。とても残念なことだ。

今出川公行の三日病

十九日、晴。明日で今出川公行左大臣の母である故南向殿の一周忌である。それで、法華経提婆品一卷を自分で写経した。その写経と銭

二貫文のお布施を今出川家へ送つた。今出川家からは「恐れ多いことと、とてもうれしいです。お礼の申しようもございません」との返事だった。今出川左大臣は、この十五日から三日病（※）で、病状が重いらしい。

さて無垢庵の田地一反を惣得庵へ寄付した。父・大通院への奉仕が特に懇切丁寧であつたので、特別に寄付したのである。

聞くところによると、来たる二十三日に称光天皇陛下は仙洞御所へお越しになるそうだ。しばらく逗留なさつて、二十八日には舞御覽で、荒序や万秋楽の秘曲などを天覧なさるらしい。田向長資朝臣は、天皇のお供の一人に選ばれた。ただ舞御覽の際に演奏する役からは外されたので、是非演奏させてくださいとお願ひしたという。

性見庵跡地での納涼

夕方、納涼のため外出した。「昌訓の小庵・性見庵の跡地にきれいな井水が湧いているので、納涼に行ってみましょう」と寿蔵主が言うので、行ってみた。まことに冷たい水だった。

井水の近くに座る場所が拵えてあつた。また冷たい物などが水に浮かべてあるなど、いろいろと用意が行き届いており、面白かった。田向三位・庭田重有・田向長資ら朝臣・阿賀丸・慶寿丸・寿蔵主らがお供した。ちょうど冷泉正永が伏見に来ていた。

この納涼の趣向は神妙である。昌訓に性見庵の跡地を御恩地として与えたので、その御礼のつもりなのだろう。

帰ってから音楽会をした。

※三日病（みつかやみ）：短期間で回復する流行病。富士川游は、麻疹の軽度のもの、流行性感冒、風疹などである可能性を示唆してい

る(富士川游『日本疾病史』、平凡社、一九六九年、二一〇～二二一頁)。

二十日、雨が降った。地蔵講があつた。二十四日の地蔵盆の日程を繰り上げて行つた。いつものように善基がお勤めしてくれた。地蔵講の世話をする当番は、私・対御方・綾小路前参議ら七人である。いつものように軽食をとつた。

さて椎野殿が仰るには、大通院から何も相続してないので、伏見宮家御料所の一部を分割していただきたいとのことである。それで伏見荘の僧坊田のうち、少しの土地を差し上げることにした。宮家が経済的に厳しいので、ほんの気持ちだけのものである。

また無垢庵の屋敷を行蔵庵に与えた。

田向経良による法安寺田の違乱

ところでまた、法安寺の薬師灯油料田を去年から事務担当者の田向三位が不正使用しているという。仏の物を違法に使うのはよろしくないことなので、田向三位に注意して、法安寺へ返させた。

それで法安寺の良明房がお礼に来了。「恐れ多くありがたい事でございます」と言つて、名のある壺を献上した。

今夜は田向家で燈呂の供養があるそうだ。

田向長資の三日病

二十一日、曇。豊原郷秋が来了。盤渉調の曲を七つ演奏した。田向三位が大鼓を打つた。田向長資朝臣は、三日病がひどくて、欠席した。

二十三日の天皇陛下のお供はどうするのだろうか。

二十二日、雨が降った。豊原郷秋はまだ伏見に滞在している。黄鐘調の曲七つと盤渉調の曲二つで、笙を吹かせた。

二十三日、雨が少し降った。夜になって大雨になった。上皇御所へ天皇陛下のお成りがあつた。足利義持内大臣や徳大寺公俊左近衛大將ら公卿十人、警備責任者が十人だという。出席者名簿を捜して、記録しておこう。田向長資朝臣は病気で気分が悪かったが、無理してお供した。

二十四日、晴。昨日のお成りは、午後五時に出発したそうだ。厳めしい行列だったそうだ。舞御覧の際に演奏したいと田向長資朝臣が申し出たところ、父の田向三位が演奏するなら許可しようとのことだったそうだ。しかし、田向三位はお腹の調子が悪いといって演奏を辞退した。それでもなお、田向長資は演奏したいとお願いし続けたそうだ。良明房が一献のお酒を少し持ってきてくれた。

田向長資、万秋楽秘曲を伝授される

二十五日、晴。田向長資朝臣は、今夜、万秋楽の秘曲を豊原郷秋から伝授された。伝授の儀式で、伝授される者は束帯、師範役は麻の狩衣だという。長資は舞御覧で演奏したかったので、急に伝授してもらうことにしたらしい。雅楽の道に対して、これはいささか失礼な態度ではなからうか。最近の行儀はすべて皆、このように安易な方向に流れているようだ。

二十六日、晴。田向長資朝臣が舞御覧で演奏することに関しては、先日のご命令通り、不許可のままである。それでも田向三位は、まだ調子が悪いということで、舞御覧には欠席のままだそうだ。

聞くとところによると、昨日、室町殿が上皇御所へ行かれたそうだ。当番の役としてお茶の準備をなさったらしい。一献の酒宴分として錢五十貫文、懸賞の品数十種を持参なさったそうだ。懸賞の品であ

る貴重な宝物をくじを引いて取り合ったという。称光天皇陛下・後小松上皇様・日野資家一位入道・広橋兼宣大納言・三条公量大納言・日野有光中納言・裏松義資朝臣・高倉永藤朝臣・慈光寺持経・女房の二位殿・上臈局・日野資家の嫁・勾当内侍・播磨局らがくじを引いて懸賞の品を取ったそうだ。

今出川公行の三日病、なお重病

聞くところによると、今出川公行左大臣の病状は重いそうだ。医師の丹波頼直朝臣に治療させているという。今出川左大臣は舞御覧にも出席できないそうだ。そのことに驚いている。

二十七日、曇。上皇様や室町殿へ八朔の贈答品をお贈りすることは、喪中であるので遠慮した方がいいかどうか、いろいろな方に尋ねてみた。そうしたら、最近では喪中の方々も贈答品を献上しているのが、問題なからうという意見であった。それでつまらない品々だが、用意することに決めた。

上皇御所での舞御覧

二十八日、昨夜から大雨だった。午前九時に雨は止んだ。今日は舞御覧である。午後五時半に舞は始まったそうだ。演奏された曲は、入場曲の春庭楽・振舞左右・賀殿（百拍子の説）・長保楽・陵王（荒序があつたそうだ）・納曾利・太平楽・狛梓・万秋楽（秘曲も含む）・新鳥蘇・散手・貴徳・青海波・胡徳楽・抜頭・八仙・退場曲の長慶子荒序であった。演奏者、笛は景親、笙は幸秋、大鼓は藤秋、鉦鼓は氏秋だそうだ。

賀殿の百拍子を伝授されていない者は、演奏してはいけないと後小松上皇がご命令になったという。そのために、結局、演奏されな

かったらしい。青海波は垣代（※）と舞人だけだったそうだ。楽人・舞人の名簿を捜して記録しておこう。

今出川左大臣は、やはり病気で欠席した。田向長資朝臣は、結局、演奏のお許しがなかったもので、参加しなかったそうだ。無念であるう。

※垣代（かいしろ）…青海波の舞のとき、舞台の南側に円陣を作り、笛を吹いたり、拍子をとったりする者のこと。近衛府の役人や院北面の武士などが用いられた。

三十日、晴。庭田重有朝臣を使者として今出川家へ派遣した。今出川公行左大臣の病氣見舞のためである。病状は少し持ち直したらしい。しかし、まだ身体の自由が利かず、全快というわけではないようだ。重有は左大臣の病床で、少しの間、対面したという。御使者を下されて、恐れ多くうれしく思っておりますと仰ったそうだ。今出川左大臣は今年、五十三歳になる。

宮家当主として初の八朔贈答

八月一日、晴。「月初めでよい兆しがある。すべて幸せだ」と予祝した。八朔の贈答品をいつものように贈った。私が伏見宮家当主となつて初めての八朔贈答なので、近習や外様の家司たちからも皆、先例通り、八朔の献上品を受けた。月初めのお祝いをした。

朝早く後小松上皇様と室町殿へ贈答品を献上した。上皇様へは大きな酒の甕一つ・長柄のついた銚子・鶴や亀の作り物を打ち付けた提（※）・引合紙三十帖を差し上げた。室町殿へは、茶碗・大鉢一つ・長柄の銚子・提・引合紙五十帖を差し上げた。上皇御所へは冷泉永基を通して献上した。室町殿に対しては、取り次ぎ役がないので、

書状を添えて献上した。

仁和寺御室の永助親王に対しては、前々の御所様である大通院が贈られていたようだが、今回は省略した。相応院の弘助親王に対しても省略した。

宮家の外様である椎野寺主・今出川家・三条家・勧修寺家・葉室家・勾当局らから八朔の品が献上された。田向三位がいつものように一献の酒宴を準備してくれた。

※提（ひさげ）：柄がなく、注ぎ口と弦がある、小鍋形の銚子。

室町殿からのお返し

三日、晴。室町殿から八朔のお返しが届いた。お返しの品は、練貫（ねりぬき）三反と縁を金で飾った太刀一振であった。これまでとかわらぬご厚誼で、ありがたい事だ。

今出川家へはこれまで通り、三日の贈答品を返した。冷泉正永と同永基から八朔の贈答品が届いた。永基からの贈答品は、これが初めてだ。

寿藏主が八朔の酒宴を開いてくれた。惣得庵主・理勝・明元・稚児たちが一献のお酒を持って来てくれた。先日、没収地の小さな田地を寄付したことのお礼だという。献上されたお酒一献が重なって、何献にも及んだ。酒宴には田向三位たちも参加した。

四日、晴。綾小路信俊前参議が一献のお酒を持参してきた。八朔の贈答としてお酒を献上しますという。勝阿も同じくお酒を献上してきた。

室町殿のお返しの小袖を宮家の女性たち、対御方・近衛局・今上臈、それに妻の今参らに各々一つずつ分け与えた。

五日、晴。綾小路前参議が滞在しているので、音楽会をした。太食調の曲十と朗詠をした。

田向長資、笙をやめる

ところで、田向長資朝臣は笙を吹かないと言い出した。舞御覧での演奏を再三申請したのに、許可されなかった。それでもう笙は吹かないつもりだという。軽はずみな考えであろう。

音楽会が終わって、酒宴をした。室町殿からの八朔お返しは初めてなので、特にお祝いの酒宴を開いたのだ。綾小路前参議や田向三位らが参加した。村人たち二三人も参加した。さらに無礼講の酒盛りになった。

六日、晴。お彼岸の初日である。風呂に入り、いつもの通り、身を淨めた。洪蔭藏主がいらいしゃった。少し一献の酒宴をした。

伏見莊僧坊田

さて伏見莊僧坊田のことだが、亡くなった兄・葆光院が僧坊田を分け与えると洪蔭藏主に仰ったという。ただし今年は無理なので、数年後に分け与えるつもりだと仰ったそうだ。「しかし、今年から僧坊田を領地にしたいので、是非、領地分割の承認書をお出し下さい」と洪蔭藏主は重ねて私に要請してきた。それは難しいと答えたが、何度も何度も言ってくるので、しかたなく了承した。それにしても、無理やりで理不尽ななれようである。

音楽会をした。一越調の曲八つと朗詠などである。

七日、雨が降った。朝早く音楽会をした。双調の安名尊・鳥破・美作・美作急・賀殿急、律の万歳楽・伊勢海・三台急を演奏した。私は催馬楽を歌うと共に、琵琶も演奏した。綾小路信俊前参議も歌と笛を

兼ねた。上皇様の音楽会のやり方を真似たのである。

洪蔭蔵主が来た。僧坊田のことを言い負かされたので、一生の間、僧坊田を支配してよろしいという内容の書状を差し上げた。

綾小路前参議が帰っていった。

貞成の板輿用材木

八日、雨が降った。綾小路信俊前参議が、板輿用の荒削りの材木を献上してきた。私が自分用の輿を持っていないので、綾小路の領地である美濃国加納郷から材木を取り寄せて贈ってくれたのである。ありがたい限りで、お礼の言葉もない。他と異なる特別な忠臣なので、困窮を顧みず、心遣いしてくれたことは、何をもって報いることができるか。同じく美濃国のおいしい食べ物も贈ってくれた。

この前から始めた御前船の酒宴、今日は庭田重有・田向長資朝臣が当番の幹事だった。納涼の船を前にして酒宴を開いた。

疏注円覚経

九日、雨が降った。お彼岸の中日なので、身を淨めた。大光明寺長老が衣鉢侍者を使者に寄こした。私の法名を早く付けるように鹿苑院主へ催促するお手紙をお書き下さいとのことだった。それですぐに書いて渡した。

また長老が疏注円覚経四帖をお返し下さいと仰るので、それも返した。

御香宮・権現・山田宮の神田を取り戻す

十一日、晴。御所侍三木善国を御香宮神主職に任命した。しかし、辞退してきた。その理由は、前神主である三木善理が御香宮の神田をすべて売り払ったので、神役を勤めることが困難だからだという。

それで、それらを買収した者たちから神田を取り戻して、もとのように神役が勤められるよう、事務担当者に命令書を与えた。

伏見荘内の権現や山田宮の神田も同様な状況だったので、同じように取り戻しなさいと命じた。

十二日、晴。お彼岸の最終日なので、身を淨めた。室町殿が石清水八幡宮放生会の儀式執行責任者の公卿となり、今日、同宮へ向かったという。お供の公卿や殿上人も指名を受けて、同行したそう。田向長資朝臣もいつもの警護責任者の役で、さらにお供も兼ねるよう命じられたという。椎野寺主が来た。

十三日、田向三位・向長資朝臣は、今日の夕方、石清水八幡宮に向かった。

石清水八幡宮放生会

十五日、晴。今日の放生会の場で、石清水八幡宮の神人たちが訴訟をしたそう。そのため、神人たちは御神輿の出発を抑えたという。しかし、神人たちは排除されて、すぐに御神輿は出発した。御神輿の巡行は無事に終わった。室町殿は御神輿がお宮へ戻るまで、着席なさっていたらしい。放生会は、厳重に執行されたそう。

儀式執行責任者の公卿は内大臣である室町殿、参議の役は万里小路時房朝臣、事務担当の弁は日野町藤光、少納言は東坊城長政朝臣、警護責任者は白川資雅朝臣・田向長資朝臣だ。

内大臣にお供した公卿は、広橋兼宣大納言・三条公量大納言・木造俊泰大納言・中山満親中納言（ただし、中山は急に喪中となり、欠席した）・万里小路時房朝臣である。

お供した殿上人は、裏松義資朝臣・飛鳥井雅清朝臣・山科教豊朝

臣・同資雅朝臣・田向長資朝臣・松木宗継朝臣・東坊城長政朝臣・西洞院時元朝臣・東坊城元長朝臣・六条有定朝臣・油小路隆夏朝臣である。

お供した六位以下の役人は、藤光・勸修寺経興・広橋宣光・坊城俊国・慈光寺持経だ。六位以下の前駆（さがけ）は六人で、高階俊経・高階経泰以下の者たちだそう。護衛の武官は十二組に編成され、衛府の役人、衛府の後衛の役人は明章だそう。午後八時頃（※）に終わったそう。

今夜は名月なので、連歌懐紙一折り分だけ連歌をした。私・椎野寺主・庭田重有朝臣の三人しかいなかったで、ただ懐紙一折り分だけ詠んで、やめにした。

※「午後八時頃」：原文では「半更」とある。これを初更（しよこう。午後七時から九時までの二時間）の半分ということで、午後八時頃と解した。

十七日、曇。名月なので、一座の連歌を行って、昨晚の続きで百韻を詠み終わった。明盛が来た。明盛がちよとした酒宴を開いた。

十八日、晴。伏見御所の旧跡に行き、椎の実を拾った。椎野寺主・庭田重有・田向長資朝臣らがお供した。

筑前国住吉本社領家職

十九日、雨が降った。筑前国住吉本社の領家職について田向三位がとやかく言うので、同職を田向に与える命令書を与えた。

今出川公行に宇治川の川魚を贈る

二十一日、曇。今出川公行左大臣が三日病にかかってから後、ずっと食欲不振だということで、宇治川でとれた鯉や鱸などを贈った。とて

も喜ばれた。八朔贈答のお返しも、ついでに贈った。これまで返礼が遅れたのは、よろしくないであった。

二十二日、雨が降った。椎野寺主が一献の酒宴を用意してくれた。僧坊田の一部を分けていただいたことに對するお礼のお酒だという。

双六の打勝

双六のトーナメント戦（※）をした。八朔贈答品の余りを懸賞品に出した。敗者には、くじで懸賞品を分け与えた。皆、面白がった。つまらない品々を皆、喜んで受け取ってくれた。

※「双六のトーナメント戦」：原文は「双六の打ち勝ちあり」。

二十三日、晴。椎野寺主が寺へお帰りになった。

二十四日、晴。室町殿が奈良に行かれて、しばらく滞在なさるそう。

相国寺住職・鹿苑院主・勝定院主・等持寺住職・崇寿院主など、主要な臨済宗寺院の長老たち五人もお供なさっているという。

御香宮神主職の就任を三木善国が承認したので、今日、任命した。

下司職半分を退蔵庵に与える

二十五日、晴。退蔵庵主が来た。伏見荘の下司職半分は、広時と契約している。残り半分を特別に退蔵庵へ与える命令書を申請してきたので、書き与えた。その御礼として酒宴一献分の銭を持って来たのである。

二十六日、晴。この前から行っている御前船の酒宴、私はまだ当番の幹事役をしていないので、今日、船の準備をした。

侍所所司代の「中央の儀」

ところで、侍所所司代から書状が来た。「三木助太郎善理は御香宮神主なので、来月一日の祭礼神事をするために、伏見荘へ帰る必

要がある。とりあえず、領主として三木善理の帰住をお認め下さいという、將軍様のご命令ができました」とのことだ。とりあえず、「返事はあとでこちらから差し上げます」と返答しておいた。

室町殿が奈良にいらっしゃるのに、この書状に「將軍様のご命令」とあるのはおかしい話だ。もしかしたら、幕府関係者の独断による対応（※）なのかもしれない。

※「幕府関係者の独断による対応」：原文には「中央の儀」とある。

二十七日、雨が降った。田向三位が京都の侍所に出かけた。昨日の返事をするためである。

即成院に預けてある文書箱

二十八日、晴。即成院に行った。預け置いてある文書箱の内容を確かめるためである。もとの文書箱リストと実際の文書箱の数が違っているのは、どうしてなのだろうか。以前は百六十一箱あった。ところが今調べたら百五十九箱しかない。二箱見当たらないのは、おかしいことである。

即成院主が一献の酒宴を用意してくれた。思いがけないことで、うれしい。夕方に宮家へ戻った。

少し体調がおかしい。もしかしたらマラリアの再発かもしれない。夜になったら、さらにひどくなった。

小芹河小田

さて、小芹河小田は没収地なので、本来の名主である下野良村・小川有禪・禅光に与えた。これらは三ヶ荘の内なので、高倉永藤朝臣が理由もなく彼らの耕作を妨害するかもしれないと言ってきた。それで、高倉の代官に事情を説明した。

それで代官との合意を取り付けたので、新たな名主たちが収獲しにいった。そうしたら、代官は問答無用で収獲する人達を追い払ったという。辱めを受けたということで、名主たちは大勢の人達を率いて、重ねて収獲を強行しようという剣幕だ。

まずは軽はずみな事をしてはいけなさと彼らに命じた。さらに高倉の代官に事情を尋ねたところ、旧主の三木から収獲を妨害するよう頼まれたということだ。

田向三位が京都から戻ってきた。侍所所司代と会って詳しいことを話した。所司代は「分かりました、ないがしろにはしません」と答えたそうだ。

（続）

